

令和4年度 国語国文学科
学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 出題の意図

問題文の出典：上野千鶴子『女の子はどう生きるか 教えて、上野先生！』岩波書店、2021年1月20日発行、pp13～16

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できているかを問うものである。

問1

- 1) 設問の趣旨を的確に捉えているか。
- 2) 課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。
- 3) 具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
- 4) 文章を整然とまとめているか。

※ この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 問題用紙

【問題】次の文章は、学校の男女別名簿への質問「共学校に通っています。名簿はどうしていつも男子が先なのですか？」に筆者が答えたものです。傍線部「伝統」という語がどのような意味で使われているのか簡潔に説明したうえで、あなたが感じる「こんなのへん」の具体例とどこがへんなのか八〇〇字以内で述べなさい。

ほんとに不思議ですねえ。名簿で男子が先なら、名簿順にならば男子が前に、女子が後になります。名簿順に呼ばれて卒業証書を受けるときも、男子が先、男子が全員卒業証書を受けとってから、女子が受けとることになります。いつからそうなんでしょうか。

小学校ができたのは、明治時代。その頃からだとしたら、「男女七歳にして席を同じうせず」で男子席と女子席を分けた名残りかもしれません。中学校になったら戦前は男女別学でした。戦後学制改革で初等教育だけでなく中等教育も男女共学にするように、占領軍に命じられてから、別学の旧制中学と旧制高等学校とが合併しはじめましたが、そのときに名簿が男子が先、女子が後になったんでしょうか。高等教育、特に大学ではどうでしょう？ 戦前は一九一三年に東北帝国大学（現、東北大学）で初めて女子学生の入学が認められ、その五年後、北海道帝国大学（現、北海道大学）で門戸が開かれました。しかしそうしたいくつかの大学を除いて女子学生を入れてくれませんでした。戦後新制大学のほとんどが男女共学になつてからは、名簿は完全に混合名簿です。名簿が男女混合でも、大学ではなんのふつこうもおきていません。大学の体育の授業は、学校および種目によつては男女別で行われていますが、名簿を別にしなれば不便、なんてこともまったくありません。大学ではふつうのことが小中高でふつうでないのは理解できません。つまり、名簿の男女別の順番には、なんの合理的な根拠もないということです。

根拠がないのに続いていることを、「習慣」とか「伝統」とかいいいます。この習慣があらわすのは、男が女よりなにごとにつけ「先」という思いこみ（社会通念ともいいます）です。先に立って歩くのは男、料理があれば先に手をつけるのは男、会長は男、リーダーは男……という思いこみが、名簿にも反映しているでしょう。こんな名簿があると、「男が先」という思いこみが、「あつたりまえ」になることに手を貸すことになります。

こんなこのへん、と感じたのはあなたただけではありません。一九九〇年代に学校の女の先生たちが「こんなこのへん」と混合名簿を使うように運動しはじめました。先生たちの運動は、「男女別じゃないと不便」とか「昔からの伝統だから」ついているんな抵抗に遭いましたが、どの反対理由も説得力がありませんでした。その結果、各地で混合名簿が増えていきました。教育行政は小中学校は市町村に、高等学校は都道府県に責任がありますから、抵抗の大きい地方では、混合名簿があまり普及していないところもあります。一部には、いったん混合名簿になったのに、反対派が押し返して、ふたたび男女別名簿に戻したところもあります。あなたの通っている学校は、どんな地方にあるんでしょうか。変化の遅い、「伝統」の大好きなオバサン、オジサンがいる地方なんでしょうか。

男女混合名簿はいまは「性別によらない名簿」って呼ばれています。LGBTQ（注）の子どもがいたら、男女別名簿のどちらに入れるか、先生も困るし、本人もつらい思いをしましょう。こんなふつこうな「習慣」や「伝統」は、さつさとやめてしまったらいいと思います。でもそのためには、誰かが最初に、「これってへん」と言わなくちゃいけないし、まわりのひとが「そうね、そうよね」とサポートしなくちゃいけないし、「今のままがいいんだ」というひとたちを説得したり、抵抗をはねのけたりしなくちゃいけないし……で、名簿ひとつを変えるんだってたいへんなんです、ふーっ。

男女混合名簿を推進した女の先生がこんなことを言っていました。たいしたことのない、ちつぽけな変化だけれど、その過程で女の先生たちがいきいきと発言するようになって、職場の風通しがとつてもよくなった。結果より過程の方が大きな成果でした、って。

質問はかんたんなのに、答えが長くなりました。ちょっとした変化も、それを変えたいと思ったひとたちがいたから起きたってこと、知ってほしいと思つたからです。そしてウカウカするとまた後戻りすることも。何より、変えたいと思えば変えられるってことを。職場の女子の「お茶くみ」もこうやってなくなりました。

あなたの「これってへん」という感覚を、これから大事にしてくださいね。

（上野千鶴子『女の子はどう生きるか』二〇二一年 岩波書店による。）

（注）LGBTQ 性的少数者を表す総称。